

今田さんの希望と、私たちに残されたこと

立木茂雄(同志社大学社会学部教授)

今田忠さんと初めてお会いしたのは1997年の秋、被災者復興支援会議の活動で、阪神・淡路コミュニティ基金を訪問した時だ。同基金の活動から、中村順子さんや実吉威さんたちを代表とする神戸・阪神間の中間支援組織を通じたサードセクター活動が孵化されたことを思うと、隔世の感がある。

1998年の夏には、カナダ・エドモントン市で開催された世界ボランティア会議にご一緒させて頂いた。震災後のユートピア期を契機に、戦後50年にして、神戸から日本の市民社会が姿をあらわせたと言語、今田さんの誠実で、知的な英語を懐かしく思い出す。

その後、市民社会研究会を主宰され、語られたことば—熟議、コミュニタリアリズム、持続可能で排除のない社会づくり—はSDGsを先取りするものであり、その先駆性に改めて気づかされる。

今田さんは、市民社会という希望を語られた。それを忠実にかたちにすることが私たちに残された務め、だと思う。